

# 弥生・古墳時代における 善光寺平の水田開発

Rice Paddy Development on the Zenkoji Plain in  
the Yayoi and Kofun Periods

白居直之

はじめに

- ①水田区画の変遷と画期
- ②農耕具にみる開発の画期について
- ③水田開発に関わる画期の要因について

## 【論文要旨】

千曲川流域の沖積低地には、弥生時代から近世にわたる数多くの集落跡と水田跡が発見されている。洪水堆積層に覆われた遺跡からは、畦畔や溝で区切られた各時代の水田区画が検出され、多量の木製農耕具が出土している。これらの水田区画と農耕具には時代ごとに特長があり、いくつかの画期を見いだすことができる。またその変化の背景には自然条件を克服した技術や政治・社会的な要因が推察される。

善光寺平の水田区画は、低地開発が始まり小規模で短期に消滅した縄文時代晩期から弥生時代中期前半までのⅠ段階、自然地形を有効利用して大・小畦畔を配した小区画水田をつくる弥生時代中期から古墳時代前期までのⅡ段階、大畦畔によって企画性を帯びた大区画をつくりその内部を極小区画する古墳時代中期から後期（奈良時代）までのⅢ段階、平安時代以降の条里型地割となるⅣ段階の大きく4期区分の変遷をたどる。農耕具の変化もこれに付随している。Ⅰ段階は、多様な形状の曲柄鍬と直柄鍬が主体で、方形板状鉄刃が装着された鍬もある。この段階には曲柄鍬の形態にナスビ型が加わる古墳前期に小画期を見いだせる（Ⅰ-②段階）。Ⅱ段階は、曲柄鍬にU字形の鉄刃が装着され、直柄の打ち鍬が消滅する。Ⅲ段階は、曲柄鍬が消滅してU字形鉄刃が装着された直柄鍬だけとなる。

ⅠからⅡ段階、ⅡからⅢ段階への変化の要因は、地域社会の解体や土地所有、開発主体の変化、畜力を導入した耕作技術の革新、気候の寒冷化などが考えられるが、今後総合的な検討が必要である。